



TITLE:

近世の恐慌と其一般的普及性

AUTHOR(S):

小川, 福太郎

CITATION:

小川, 福太郎. 近世の恐慌と其一般的普及性. 經濟論叢 1926, 23(5): 826-831

ISSUE DATE:

1926-11-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128468>

RIGHT:

京都帝國大學經濟學會

經濟叢論

第二十三卷 第五號

大正五年十一月一日發行

論叢

消費稅の理想としての專賣

教授 法學博士

神戸 正雄

價格の一理論

九州帝國大學
教授 文學博士

高田 保馬

伊豫の百姓一揆

教授 經濟學士

黒正 巖

時論

再び我國の人口問題に就て

教授 法學博士

山本美越乃

說苑

アダム・スミスの勞賃論

講師 經濟學士

森 耕二郎

妙心寺の寺領と領民の負擔

經濟學士

中川與之助

雜錄

近世の恐慌と其一般的普及性

高松高等商業學校
教授 經濟學士

小川 福太郎

信州小布施の地割制度

教授 經濟學博士

本庄榮治郎

Vital Statistics に就きて

教授 法學博士

財部 靜治

英吉利海運の統計的研究

教授 經濟學博士

小島昌太郎

勞農露國の豫算

經濟學士

吉川 秀造

法令

シムムペーターのシムモッラー觀

經濟學士

菊田 太郎

郵便年金令・郵便年金特別會計規則・郵便年金規則・簡易保險規則中改正

雜 錄

近世の恐慌と其一般的普及性

小川 福太郎

一

恐慌なる言葉が英語の crisis の譯語にしてこの英語は又「決定す」この意味を有する希臘語に由來し夙に醫學上に用ひられて病氣の經過中の或轉回點を指したるものであるが、後に移されて經濟學の一用語となるに至つたことは學者の説くところである。¹⁾而して經濟現象に就て恐慌といはるゝ時それは正に經濟社會の危機を指すものであることも疑ひを容れない。然し乍ら經濟恐慌の意義は必しも明白ではなく異説の存することは今尙「經濟學上の言葉の中にて恐慌なる言葉程不明確なるものはない」と謂ふ學者あることに依つても知られるのである。従つて茲に

近世の恐慌に就て少言を費すに當り、先づ恐慌の意義に就て述べる必要がある。

學者、此の恐慌に定義を與へて「凡て經濟生活の何等かの攪亂なり」といふ、然るにこれと類似せるがために其間に區別の存するや否やを疑はしむるものは、パニック並びにデプレッションと稱せらるゝものは是れである。

論者の中には、クライシスとパニックとの區別を設けず同視する者もあれど、區別をなす者はパニックを以つて恐慌の起りし際に發生することある驚怖又は狼狽の如き心理的狀態を指すといふ。²⁾従つて此説に従へばパニックなるものは恐慌の現象を特に其心理的方面より見たるもの、名稱となり、恐慌は其實質的現象其ものを指すこととなる。而して此場合のパニックの内容なる驚怖又は狼狽はその起るべき根據を有してゐるといはねばならぬが、然し尙、其他にもパニックと稱すべき場合ある事も認めざるを得ない。パニックの語義は本來同じ驚怖狼狽の中でも特に根據の實在せないものに對していふの

1) cf 神戸博士、經濟論集、純理、p. 279; 財部博士、經濟循環期論 (經濟論叢第八卷三號 p. 84)

2) H. Fruchy, Cours d'économie politique, Tome II. 2^e éd. '23. p. 470.

3) T. E. Burton, Crises and depression. '20. p. 17.; 神戸博士: op. cit. p. 285

であるから、恐慌の時に限つて起るものである^{*}とはいへない、實際に於ても、恐慌と稱すべき時でなくとも何等かの突發事件の生じた際に、將來の市況に不安を感じて驚怖狼狽し其爲に預金の取付、株式市價の崩落を生じ、しかも其結果は杞憂に過ぎなかつたといふことは屢々起れるところである。従つてクライシスと區別する必要は寧ろ此の後の如き場合に於て一層多く存する如く思はれる。

次にクライシスと沈滞又は不況といふ譯語を以て示さるゝデプレッションとに就ては兩者を區別して、前者は其經過に於て急激であつて期間に於ては短く一時的であり、後者は其經過に於て緩慢であつて期間に於ては長く數年に亘ることなす者が多い⁴⁾。かく兩者を區別することは、特に近世の恐慌を以て、前後の事情と關係なき特異なる現象としてそれのみを研究することなく、寧ろ景氣循環現象の中に起り來るべき一過程として主として觀察し、且つ其循環現象を四分して好況期、恐慌期、不況期、回復期となす

に至つてより廣く行はれるところである（就中所謂ビジネス・パロメーターの作成に於て）と見ることが出来る。

かくてクライシスとデプレッションとは一應區別せられるが、然し前者の經過が急激であることに就ては異論がある、蓋し、過去に於ては、好景氣の極まるころ嵐の如く襲ひ來れる攪亂の時期があつたが、近代にあつては好景氣の以後急激なる攪亂を見ずして緩慢に經過し長き不景氣の來る場合を屢々生じてゐるからである。（其原因と見るべきもの多々あれど、之が論述は省略す^{*}）。其故を以て、クライシスを以て必しも急性のものゝみを指すことなく、是れが意義を單に「凡て好況期より不況期への轉移」⁵⁾となし、其急性なるものに對しては之れを *Crisis* と稱するものあると共に、クライシスを廣く解釋して、デプレッションと稱せらるものを包括せしめ其細分として廣狹二義を認むるものもある⁶⁾。

かゝる見解に對して先の區別をなす者は之れ

* Webster, New International Dictionary.

4) Burton, op. cit. p. 10; M. Ansiaux, 'Traité d'économie politique Tome III. 26. p.p. 173-174. 松崎宗氏、銀行及金融 p. 349.

* cf. 神戸博士, op. cit. p.p. 302-310

5) A. Aftalion, 'Les crises périodiques de surproduction, Tome I. 13. p.p.

を以て或は言葉の濫用なりとし或は此種の研究に於て觀念の輪廓の明確なることの必要なることを述べ兩者の區別を力説する。然し乍ら、先の區別の分るゝ點は、期間の長短と其經過の緩急とに過ぎないのであつて、クライシスとデプレッションとの間に經濟生活の攪亂といふ點より見て實質的に異なるべきものを發見することは困難なる様に考へられる。兩者の時期に於ては何れも、好景氣の時期に於けるとは正反對の内容に富み、販賣の停滯、物價の下落、利潤の減少、勞賃の低下、破産の増加、失業者の發生を見る。又デプレッションと稱せらるゝ時期がクライシスと稱せらるゝ時期に比べて、經濟社會に與ふる打撃の小なるにあらずして其間に優劣を立て難いものがあり、攪亂狀態の存在することは共に同じであるといひ得るであらう。要するに兩者は言葉の由來に相違あるも、其區別は形式的なる便宜上のものであつて此點よりして假令クライシスに急性なる經過を採りて起るものと其慢性的にしてデプレッションと稱せらるゝ

ものあることを認むることも、本質的には峻別すべきものがない様に思はれるから、恐慌の意義を廣く解しデプレッションを包含せしめるのである。而して其經過に緩急の差あるは主として、根據を有するバンクの存否と信用組織の動搖の大小とに關聯するところが多い様である。⁶⁾

二

恐慌の意義を以上の如く解して、次に近世の恐慌の一特徴たる一般的普及性といふべきものに就て述べるに先ち、恐慌の分類に言及せねばならぬ。

恐慌の分類は其標準を其發生原因、其特質、或は其發現の範圍等にそれ〴〵置くことに依て、若干の種類に分つことが出来るが、學者の掲ぐる所は必しも一致せない。其發生原因による分類は今暫く措き、其特質及發生の範圍によるものを見るに、前述の經過の緩なるものと急なるものとに分つもの、其他、生産恐慌、分配恐慌、流通恐慌、消費恐慌の四分とするもの或

12-13,

6) 神戸博士 op. cit. p.p. 287-288

7) Burton, op. cit. p. 10; Ansiaux, op. cit. p.p. 173-174

8) cf. M. Bouniatian, Les crises économiques (traduit du russe) '22. p. 40.

は細別して商業、工業、農業、取引所、貨幣、金融、信用等の形容詞を冠したるものに分つもの、更に大別して一般的恐慌と特殊の又は部分的恐慌となすものなどがあると共に、他方に於ては單一なる形容詞を冠して近代の恐慌を總稱せしめんとする論者もある、例へば、一切の恐慌は結局信用の破壊として最も顯著に其特質を現はすが故に恐慌は其發生原因の如何を問はず、凡て信用恐慌と總稱するを可とすべく、恐慌の分類は殆んど無意味であるといふが如きは是れである、固より、何等の特徴も其間に見出されざる無益なる分類は採るべからずと雖も、然し又、近代の恐慌を單に信用恐慌となすは其一特徴たる信用の破壊を現はす點に於て不可なきも、是れ單に信用といふ方面より見たる名稱であつて他の特徴より見れば異なる形容詞を付することが出来るであらう、例へば資本恐慌、商品恐慌といふが如きである。従つて恐慌の種類を考察することは却つて時空を異にして發生する恐慌の原因、特徴、範圍を知り其異同を明に

する上に効果があると考へる。⁽⁹⁾

恐慌の發現範圍を標準として一般的恐慌と特殊の又は部分的恐慌とに大別することは適當であらうと思ふ。後者は孤立的に或特定なる産業、營業或は流通界に現はるゝものであつて商業恐慌、工業恐慌、農業恐慌、取引所恐慌、金融恐慌、信用恐慌、貨幣恐慌といふが如きものである。反之、一般的恐慌は普通には經濟社會全般に起るものと稱せらるゝが、然し必しも何れの産業或は營業にも洩れなく起ることを要せない、特殊の又は部分的に對して一般的といふものである。之れ此の一般的恐慌なるものが、若干の經濟活動部門を侵して一方他の若干の部門を見逃すといふ二つの留保の下に概評せられることを注意せる論者ある¹⁰⁾所以である。

以上の意味に於ける一般的恐慌と特殊の恐慌との區別は、恐慌の變遷發展の歴史より見て特に重要なものである。蓋し以前に於ては凶作に依て農業界にのみ起ることある農業恐慌や財政の紊亂を特徴とする財政恐慌が孤立的偶發的

- 9) 津村博士、訂補國民經濟學原論、下卷、p. p. 725-727; 松崎壽氏 op. cit. p. p. 349-350
- 10) cf. 財部博士、前註論文 (經濟論叢第八卷六號 p. 45)
- 11) Ansiaux, op. cit. p. 174

に發生したことが多かつたが、近代に於ては恐慌といへば一の特定なる産業又は營業にのみ起るにあらずして多くの産業營業に起ると共に回歸的であるといふ一種の型を持つてゐるものが多いからである。即ち近代の恐慌は一般的なることを其一の特徴として持つてゐるものである。而して茲に注意すべきことは、一般的といつても必しも殆んど同時的に多くの産業營業に恐慌が起るにあらずして、先づ最初或部門に生じたる擾亂が次第に他の部門に波及して行くのを常とする、Lescure が其著の標題を「生産過剰の一般的並びに回歸的恐慌」となせるにも拘らず、書中に於て、恐慌が一般的ならず寧ろ一般化される¹²⁾といへるは此意味を示してゐるものであらうと思ふ。

然らば近世の恐慌は何故に斯く一般的に普及せんとする傾向を有するのであるか。其理由の一つとしては、商品生産及び分業の多様複雑となれる近世の經濟社會に於て、各種の産業營業が其存立を續くる上に於て密接なる相互依存の

關係を有してゐることを舉げ得る。従つて例へば或原因のために多數の商品の販路停滯を來さんか、各商品の完成を業とする者、其原料販賣者其他販賣の爲に要する各種の便宜や勞務を提供する者に不利なる影響を與へると共に、後者は亦其反射的影響を他の多くの營業に與へるに至るのである。而して尙他方に於ては近世の信用組織の複雑にして、甲が乙丙の債權者たると同時に其等の債權を擔保とし又は割引して丁戊の債務者となるが如き關係が到る所に存在し特に好景氣の間に於て其範圍分量を増大せることを一つの理由とせねばならぬ。従つて一朝或方面に於てかゝる信用關係の連鎖が破られんか、其打撃は多方面に及ぶに至るのである。Bouniatian が、恐慌に於ける擾亂の波及を以て、各種の部門の密接なる相互依存關係並びに特に其等の部門が、凡ゆる種類の擾亂に敏感なる金融市場に依存せる事の結果としたることは尤もであるといはねばならぬ¹³⁾。尙又、彼れがかゝる一般的恐慌の發現の順序に、幾分か規則性を認め得られ

12) J. Lescure, Des crises générales et périodiques de surproduction. 3ed. '23. p. 460

13) Bouniatian, op. cit. p. 130

るとなして説けるところは、肯綮に當るものを以て、次に其大様を掲げる。

「一般的經濟恐慌は通常先づ取引所恐慌に發する、好景氣の間に増大したる取引所投機及び企業熱は、金利の騰貴を生じ且つ經濟活動衰退の兆候の現はれるや否や、根底を失つて崩壊する。而してかゝる常軌を逸したる經濟的發達が其他の諸範圍に波及し終るには時として若干月を要する。商品流通の停滯の増大し來る時は、是迄工業の不自然なる活動を相當長き期間に亘つて維持したる信用は更に緊縮する。企業者が損失を蒙り且つ信用の緊縮に依て漸く好景氣持續の信頼が動搖し始める時に、信用關係は破壊され一般的清算は避くべからざるものとなる。かゝる時に事業界はパニックに襲はれ人々は、發生の可能性ある損失を避ける爲に急速にして強行的なる處置を採る。其結果パニックは信用恐慌を導き後者は多くの場合に於て貨幣恐慌と關聯する。此の信用恐慌と貨幣恐慌とは先づ金融機關を襲ふ、而して若し金融機關が既に熱狂

的なる投機の渦中に投じて居つたならば、事態は更に銀行恐慌を併發する。次では信用の助けに依て維持されたる商品の價格の崩落となり、商業恐慌又は商品恐慌が勃發する。又それが爲めに、既に注目を惹ける工業生産の不振が一層濃厚となり、延期されたる工業恐慌は始まり、勞働恐慌之れに續く。我國に於ける最近の回歸的恐慌として明治四十年に起れるもの并びに大正九年に起れるものが何れも其端を取引所恐慌に發してより各方面に攪亂を起し、而かも其波及が略々右の説述に似たるものあるを見るは興味ある事である。¹⁴⁾

終りに近世恐慌の特徴は必しも既に述べたるもののみではない、尙、其他に全國的に將た國際的に波及せんとする傾向ある事も¹⁵⁾、一面には右の一般的普及性の餘波とも見るを得るものがある共其傾向を助くる多くの原因の存在する事を認めねばならぬ。更に又、近世の恐慌が商業より工業に向つて其攪亂の中心を移しつゝあるが如き傾向あることも注意すべきものであらう。

14) Bouniatian, op. cit. p.p. 130-131.

15) cf. 東洋經濟新報社編、金融六十年史 p.p. 466-475. and p.p. 543-551.

16) cf. 神戸博士 op. cit. p.p. 310-311